

子供の将来を決定するのは幼児期の教育です。「三つ子の魂百までも」といふ^{ことわざ} 諺は日本にだけあるのではありません。What is learned in the cradle is carried to the grave. (揺り籠^{かご}の中で学んだことは死ぬ^{まで}迄忘れない)とか、The child is father of the man. (子は人の父 つまり「三つ子の魂百までも」に当たる)といった格言・諺の類^{たくひ}が世界中にあります。

人間の可能性はどれ位でせうか。それは無限といっても言ひ過ぎではありません。悪くすれば動物以下になりますが、うまく行けば天才に育てることも可能です。

悪い方の例を挙げませう。一九二〇年のことです。イソドのゴタムリといふ小さな村で二人の少女が発見されました。有名な^{おおかみ} 狼少女アマラとカマラです。二人は狼に育てられたために獣のやうに四つ足で走り回り、狼のやうに^{とほほ}遠吠えをし、言葉は一言も^{しゃべ}喋れませんでした。二人を発見したシング牧師夫妻の努力にもかかわらず、アマラと名付けられた年下の少女は間もなく死に、カマラと名付けられた年上の少女も九年後に死ぬまで知能の発達がほとんど見られませんでした。シング牧師の育児日誌によれば、カマラの習得できた言葉は死ぬまでに四十五語

知能は三歳半の子供位だったといふことです。死んだ時の推定年齢は十七歳でした。

次に良い方の例を挙げませう。こちらは最近の例です。アメリカ人と結婚して四女をまうけた日本女性ジツコ・スセディック夫人の著書によると、「四人の子供たちはいづれも知能が優れてゐるばかりでなく、音楽や絵画などの芸術に対する造詣^{ぞうけい}も深く、又一面では料理を楽しむといった家庭的な面もある、まことに^{きんかう}均衡のとれた素晴らしい少女たちです」。たとへば長女のスーザンは、五歳の時、幼稚園から、いきなり高校に進学しました。そして、十歳でマスキンガム医科大学予科に入り、現在は、十七歳でイリノイ大学の大学院で学んでゐる天才児です。しかし天才といはれる子供にありかちな^{かたよ}偏った所は全く無く、音楽や踊り^{をど}を楽しみ、自分で作詩作曲もし、妹たちの面倒をよく見、料理が大好きで毎週、^{きれい}綺麗に飾ったケーキを家族のために作るといふ^{めんどう}具合に、まことに申し分の無い女の子です。下の三人の子供たちも、それぞれ、知能指数が160以上あり、全米の上位五パーセントに入る天才児で、アメリカの柔軟な教育判度のもとで、年齢よりもはるかに進んだ教育を受けてゐます。これはスセディック夫妻の愛情と創意に満ちた教育の成果に

他ならないと思はれます。スセディック夫妻の子供たちに対する教育は、実は子供たちが胎内にいた時から始まっているのですが、窮極的に言へば、子供の教育は胎児にまでさかのぼることが出来るかも知れません。しかし、この例はまだ科学的に多数の例で証明されたわけではありませんから確言することは出来ません。これから先このやうな試みがなされて、素晴らしい子供たちが次々と成長してくれることを期待します(スセディック夫妻の教育に関しては『胎児はみんな天才だ』ジツコ・スセディック著・祥伝社 参照)。

幼児期の教育が子供の知能の発達にとって重要だといふことを実証する例はいくつもあります。

その一つは、フランスの言語心理学者ポール・ショシャルの調査です。ショシャルは、フランスに住んでゐる白人と黒人の子供の知能検査をしました。その結果は、白人の子供の知能指数(IQ)の平均は100、黒人の子供のIQの平均は90でした。当然黒人の子供は、白人の子供より知能が劣ると考へられるでせう。しかし、面白いことに、幼いうちにフランスに渡って来た黒人の子供たち、つまり幼い時からフランス語で育てて来た子供たちの平均IQは、白人の子供たちと同じ100前後

でした。この点にヒントを得て研究した結果、三歳までにフランスに渡り、フランス語を覚えた子供たちのIQは、普通の黒人の平均を上廻り、白人並に知能が高くなることがおかつたのです。そして知能のもととなる言葉の学習は、五歳以前が重要で、この時期に豊かな言葉を身につけると、知能が高まるばかりでなく、その後外国語を身につける際にも役に立つことが判りました。